

図書館を批判的にみる視点—根本先生御退任に寄せて

吉田右子[†]

[†]筑波大学 図書館情報メディア系

根本先生とはじめてお会いしたのは、当時、在籍していた図書館情報大学の卒業研究の最終発表会です。図書館情報学という学問領域への問題意識だけは強くそれでいて学業に熱心に取り組まなかったせいで、どう考えてもテーマと中身がアンバランスな論文を提出した直後のことでした。卒業後、数年間図書館で司書として働いた後に大学院に戻った私は根本先生のゼミに入り、博士論文を提出するまで直接、ご指導を受けました。

図書館情報大学の修士課程のゼミでは、根本先生が当時、翻訳書を出された Michael H. Harris の論文を読みました。Harris は図書館にかかわる固定的な視座と主流文化中心の解釈に疑義を呈する公共図書館史の修正理論を提出し、アメリカ図書館史研究に大きな影響を与えた研究者です。図書館専門職サービスを文化再生産の観点から批判的に検討する Harris の議論を通じて、根本先生は図書館情報学研究の課題と可能性を示してくださいました。

研究の初期の段階で、図書館情報学にとって理念と実践の相互関係を批判的に再構成していく作業が重要であること、そして実践との緊張関係を保ちながら、これまでの図書館研究における所与の条件を常に問題化することを根本先生のもとで学びました。

図書館情報学における研究領域として歴史研究を選んだ私は、歴史的事象の細部に没入しつつも、同時に自分自身の研究と現場との距離に常に焦燥感を抱きながら研究を続けてきました。しかし根本先生の実践者としてのテーマの選び方、そして常に現実に立ち向かっていらっしゃる姿を身近に拝見するたびに、実践との緊張関係を持ち続けるという図書館研究の原則をいつも繰り返して思い出すことができました。

1995 年に東京大学に移籍されてからは、根本先

生は占領期の研究、図書館情報専門職の研究、学校図書館の研究等に次々と取り組まれました。占領期の研究や図書館情報専門職の研究では、共同研究者として研究プロジェクトの一端に加わることになりました。共同研究を通じて学んだ研究視点とアプローチは、もし個人研究を続けていたとしたら得ることができなかったものでした。とりわけ図書館情報専門職の研究は、ライブラリアンシップという図書館研究の最も基本的な領域に立ち戻る機会となりました。

常に広い射程のなかに研究テーマを設定し、緻密な分析によって研究課題の本質に迫り、その結果を論理的かつ説得力ある文体で記述する根本先生の研究スタイルは、指導を受けた学生だけでなく図書館情報学研究者にもよく知られています。この 3 つを揃えることの困難さについては、研究者であればだれでも経験しているのではないのでしょうか。一方、ゼミでは研究の細かな技術よりも、テーマ設定、分析方法の妥当性についてアドバイスをいただくことが多かったと記憶しています。研究のスタート地点で本質的なアドバイスをして下さった後は、あまり細かいことにこだわらず自由に研究する私たちを見守ってくださいました。そういう意味で根本先生は緻密だけれどもとてもおおらかだという印象が私には強いのです。

自分のゼミを持つようになって、テーマの方向性よりも研究の枝葉に目が向いてしまいがちな時に、過去の根本先生のゼミを思い出して軌道修正する日々はこれからも続くと思います。そして直接ご指導していただく機会が減ったとはいえ、根本先生のご研究の成果を通じて、図書館情報学研究を切り開いていく精神とその結果生み出されるとぎすまされたアカデミックな言説から、これからも学び続けたいと考えています。